

NPO法人 武士道協会

発会式

発会記念講演会

■日時■ 平成二十年一月三十一日（木）

発会式 十三時～十三時四十分

発会記念講演会 十四時～十七時三十分

■会場■ P H P 研究所東京本部 多目的ホール

■スケジュール■

◇発会式 十三時～十三時四十分◇

発会の言葉 塩川正十郎◎武士道協会理事長

協会役員紹介

ご挨拶 江口克彦◎武士道協会副理事長

ご挨拶 小野晋也◎武士道協会専務理事

記者会見

◇発会記念講演会 十四時～十七時三十分◇

ご挨拶 塩川正十郎

武士道の系譜 笠谷和比古

日本国際文化研究センター研究部教授

教育現場と武士道 植田宏和

全日本教職員連盟委員長

儒学と武士道 安岡正泰

(財)郷学研修所 安岡正篤記念館理事長

神道と武士道 矢作幸雄

神社本庁教誨師、元筑波山神社権宮司

ビジネス現場と 江口克彦

武士道 P H P 総合研究所代表取締役社長

【司会】本多百代◎武士道協会常務理事、事務局長

武士道協会発会記念講演会

武士道を現代に問う

講師 紹介（講演順）

笠谷和比古◎かさや かずひこ

国際日本文化研究センター研究部教授

武士道協会常務理事

昭和二十四年、兵庫県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。専門は歴史学・武家社会。平成元年、国際日本文化研究センター助教授、平成八年より、国際日本文化研究センター研究部教授。この間、ドイツ・チューリッゲン大学、ベルリン大学、中国北京外国語学院、フランス・パリ大学の客員教授を歴任。

【著 書】

『新訂日暮硯』（岩波文庫 1988年）

『主君「押込」の構造』（平凡社選書 1988年。88年度サントリア

学芸賞。講談社学術文庫 2006年）

『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館 1993年）

『関ヶ原合戦』（講談社選書メチエ 1994年。講談社学術文庫 2008年）

『徳川吉宗』（ちくま新書 筑摩書房 1995年）

『江戸御留守居役』（吉川弘文館 2000年）

『関ヶ原合戦と近世の国制』（思文閣出版 2000年）

『武士道 その名譽の掟』（教育出版 2001年）

『武士道と現代』（扶桑社 2002年。文庫版 2004年）

『武士道と日本型能力主義』（新潮選書 2005年）

『関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館 2007年）

『公家と武家―官僚制と封建制の比較文明的考察―』（編著。思文閣出版

2008年）他

1

植田宏和◎うえだ ひろかず

全日本教職員連盟委員長

武士道協会理事

昭和三十五年、徳島県生まれ。鳴門教育大学大学院 学校教育研究科修了。徳島県公立学校教員、全日本教職員連盟事務局次長、事務局次長、副委員長を経て、全日本教職員連盟委員長に就任。現在に至る。

安岡正泰◎やすおか まさやす

(財)郷学研修所 安岡正篤記念館理事長
武士道協会理事

昭和六年、東京都生まれ。昭和三十一年、早稲田大学第一法学部を卒業、日本通運株式会社入社。平成元年、同社取締役(総務、人事、労務部門担当)に就任。平成三年、常務取締役、五年、常務取締役中部支店長を経て七年、退任、関係団体役員を経て、平成十一年、財団法人郷学研修所 安岡正篤記念館理事長に就任、現在に至る。著書に、『為政三部書に学ぶ』(到知出版)他。

矢作幸雄◎やはぎ ゆきお

神社本庁教誨師、元筑波山神社権宮司
武士道協会理事

昭和九年、茨城県生まれ。国学院大学に学び、昭和三十六年、大洗磯神前神社権禰宜。鹿島神宮禰宜、筑波山神社権禰宜等を経て、現在、薨(りゆう)神社禰宜。神社本庁教誨師として昭和五十八年よ

り水戸少年刑務所に六年、茨城農芸学院に二十年、収容青少年の相談指導にあたる。平成四年と十年に、筑波大学大学院非常勤講師をつとめる。歴史考房回帰洞を主宰。鹿島神宮教学顧問、鹿島新当流彰古会顧問、鹿島神流武道連盟顧問。著書に『ともしび』(昭和三十七年にNHKテレビドラマ放映)、『やまとたけるのみこと』『につぼんばんざい』『古代筑波の謎』等。

江口克彦◎えぐち かつひこ

PHP総合研究所代表取締役社長
武士道協会副理事長

昭和十五年、愛知県生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。松下電器産業株式会社入社後、昭和四十二年、PHP総合研究所秘書室長、取締役、常務取締役を経て、昭和五十七年、専務取締役。平成六年、副社長。平成十六年、社長に就任。松下幸之助のもとで二十三年間、直接指導を受ける。内閣官房道州制ビジョン懇談会座長、公務員制度の総合的な改革関する懇談会委員、内閣府沖縄新世代経営者塾塾長なども務める。著書に『地域主権型道州制』『脱「中央集権」国家論』『経営者の教科書』『いい人生の生き方』など多数。

武士道の系譜

国際日本文化研究センター研究部教授

笠谷和比古

はじめに

* 武士道をめぐる誤解の言説

新渡戸稲造『武士道』の武士道論は近代明治ナショナリズムの産物。

「伝統の発明」の典型という言説

一、武士道の成立―中世の弓矢の習いから近世の武士道へ

* 中世社会で「弓矢取る（身の）習い」「弓矢の道」と称せられていたものは、戦国時代をへて近世・徳川時代に入るとともに「武士道」という新しい表現に。

* 中世においては「もののふ」「つわもの」など様々な呼称が、「武士」という表現に定着。戦闘方法が中世の騎馬弓射によ

る一騎打ちを主体とした様式から次第に集団戦に重心移動することから、武器として槍が戦場における主要な武器。「槍ひとすじの者」

鉄砲が大量に導入されることよって「弓矢」という言葉が必ずしも彼らの存在を特徴づけるシンボルではなくなってきたことによる。

「武士道」の語の出現

* 「武士道」という言葉がいつごろから登場してきたかは明確でない。十七世紀前半頃。

* キリシタン宣教師たちの手で一六世紀末から一七世紀初めにかけて編纂された『日葡辞書』には「武士道」という言葉はいまだ見られぬ反面、「Buo ブタウ（武道）」という見出し³語、それには「Buxino nichu（武士の道）」という説明。「Qitba キュウバ（弓馬）」もあり。これの説明にもやはり「Buxino nichu（武士の道）」という表現。

* これらからして十七世紀初頭の頃には「武士道」という言葉は未形成。

「武道」ないし「武士の道」という表現はすでに定着。

この頃から遠からずして「武士道」という近世的表現が形成。
* 武田流軍学の経典『甲陽軍鑑』は徳川時代の初期、元和年間（一六一五〜二三年）に編纂。同書において「武士道」という言葉が三十数回出現。

『甲陽軍鑑』の普及度の高さ

近世兵学の聖典 武士社会への広

二、徳川時代の武士道論

小幡景憲と『甲陽軍鑑』

*『甲陽軍鑑』は武田信玄の事跡とその軍法、そして甲州武士の心構えを記した全二十五巻からなる大部の書であり、武田流（甲州流）軍学の根本経典。

*小幡勘兵衛景憲は江戸前期の軍学者（寛文三・一六六三年没）、幕臣。甲州流軍学の祖。武田家家臣小幡昌盛の三男。武田家滅亡後に十一歳で徳川秀忠の小姓に召し出されるが、のち修行のため流浪。大坂の陣の功により帰参を許され、寛永九（一六三二）年、幕府使番を務め、のち知行千五百石。

「人つかひ給ふ様あしく御座候と先日も大形申上るごとく
（中略）武士道の役にたつ者をば、米銭の奉行・材木奉行
或は山林の奉行などに被成」

「親兄弟の敵討たる者（中略）敵をとらねば武士道はすたりたり、武士道をすてたれば、あたまをはられて堪忍仕べし、あたまをはられて堪忍致す者が、何とて主の役に立つべき」

小笠原昨雲『諸家評定』

*『諸家評定』は兵学者小笠原昨雲が元和七（一六二二）年に編纂した二十巻の兵学書。

明暦四（一六五八）年に二十冊で刊行されている。小笠原昨雲は小笠原氏隆流の兵学者で、武田家に関係の深い軍師の一人。

*「武士道」の意義変質　武士道は勇猛一辺倒にあらず

「それ武士としては、意地なからんは弱兵なるべし。其意地つよき人は、かならず以てたしなみふかきもの也。意地なからん人は、忠功をも仕る事これ有るべからず（中略）意地なき人は、なびくまじき子細なれども、時の褒美にまよはされ、4あるひは時のけん「権」におそれて、今日味方に来るかと思へば、明日は敵となり、世俗にうちまたかうやくといふごとくなる事は、意地なき故なり。これ武士道には大きにいむべき事なるべし」

「武士道は、はげみつよく、かたちをすねしく、力をつくしたるのみ、本意なりとはすべからず。ただ不実なき働きを以つて、善なりと云つべし。まことに和漢の軍書あまねくおほしといへ共、みな実儀あるを以つて、善なりとする也（中略）されば忠をもつぱらとして、勇をもつぱらとせざるは、善なる者也」

如偏子『可笑記』

近世前期に登場した書物において、武士道概念の歴史に重要な足跡を残しているのが寛永年間に出版された『可笑記』である。『可笑記』は五巻からなる武士教訓書、寛永一九（一六四二）年の板行。同書のスタイルは『徒然草』を擬した随筆体で、時世を風刺し、当世武士の不覚悟を訓戒する教訓書。作者は齋藤親盛 *saito tikanori* という名の浪人武士（旧山形藩最上家家臣）。

* 同書が世にでるや人々の間で好評を博し、寛永一九年版のち万治三（一六六〇）年にも新たな版本が出版され、さらに刷りを重ねながら元禄時代に至ってもなお流布。

「当世のわかき侍に**武士道**を吟味し、剛なる心がけをたしなむべしといへば、はうばいづきあらく、少の事にも小ひじをばり、眼をみはりうでだてをし、詞をちらし、いはれまじき悪口して、けんくわずきとなり、犬、猫、庭鳥のよりあひのごとし」

「**武士道**のぎんみと云は、うそをつかず、けいはくをせず、ねいじんならず、へうりをいはず、どうよくならず、不礼ならず、物毎じまんせず、おごらず、人をそしらず、ぶ奉公ならず、はうばいの中よく、大かたの事をば氣にかけず、たがひに念比にして人を取たて、じひふかく、義理つよきをかんよ

うと心得べし、命をしまぬ計をよき侍とはいはず」

* 徳義論的な武士道論の成立

* 『可笑記』の普及度の高さ。近世小説の祖型として井原西鶴ら後代の作者たちからも尊重、敬慕

* 武士道説は武士社会の限定を超えて、一般庶民の社会の中へ普及

ex. 菱川師宣の武者絵本『古今武士道絵づくし』

（貞享二〇一六八五年 江戸で出版）

山本常朝『葉隠』

* 佐賀藩士の山本常朝が隠退後の一時に、同藩の若い武士の求めに応じて佐賀藩鍋島家の武士の心得の数々を口述して成った書物である。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」

* 没我的献身と諫争の精神との二面性

「御無理の仰付、又は不運にして牢人・切腹被仰付候とも少も不奉恨、一の御奉公と存、生々世々御家を奉歎心入、是御当家（佐賀藩鍋島家）の侍の本意、覚悟の初門にて候」

* それは没主体的な奴隷の服従を意味するものではない。

「仰付にさへあれば理非に構わず畏り」

「さて氣に不叶事はいつ迄もいつ迄も訴訟すべし」

「主君の御心入を直し」「御国家を固め申すが大忠節」

* 自我意識が強烈で容易に支配に服さない者たちこそ、御家のためには真に役に立つものとする逆説的な関係

「曲者は頼もしき者、頼もしき者は曲者」

室鳩巢 『明君家訓』

* 室鳩巢は近世中期を代表する朱子学者の一人。名は直清で、新助。

万治元（一六五八）年に医師室玄樸の子として江戸の谷中に生まれ、十五歳で加賀藩前田家に仕えたのち、藩主前田綱紀の命で京都に遊学して木下順庵の門に入って朱子学を学んだ。同門に新井白石があり、相並んで秀才をうたわれた。正徳元（一七一）年に白石の推薦で幕府儒者に取り立てられて幕臣に列し、禄米二百俵を給されている。

* 正徳五年 刊行『明君家訓』 武士の自立性と節義の精神
理想の武士像

「君たる道にたがひ、各々の心にそむかん事を朝夕おそれ候、某身の行、領国の政、諸事大小によらず少もよろしからぬ儀、又は各々の存寄たる儀、遠慮なくそのまま申し聞けらるべく候」

「節義の嗜と申は口に偽りをいはず、身に私をかまへず、心すなをにして外にかざりなく、作法不乱、礼義正しく、上に不諂、下を不慢、をのれが約諾をたがへず、人の患難を

見捨ず（中略）さて恥を知て首を刎らるとも、おのれがすまじき事はせず、死すべき場をば一足も不引、常に義理をおもんじて其心鉄石のごとく成ものから、又温和慈愛にして物のあはれをしり、人に情有を節義の士とは申候」

* 主命と、家臣たる武士の自己の信念との二律背反問題

「惣じて某ソレガシが心底、各々のたてらるる義理（正義の道理、信念）をもまげ候ても某一人に忠節をいたされ候へとは努々ユメユメ不存候、某に背かれ候ても、各々の義理さへたがへられず候へば於某珍重存候」

* 『諸家評定』『可笑記』の提唱する徳義論的武士道論の確立

* 『明君家訓』のたどった運命 机上の議論から徳川社会の6

“生ける武士道”へ

徳川吉宗による推奨 徳川幕臣たちの標準的武士道に

むすびに

教育現場と武士道

全日本教職員連盟委員長

植田宏和

二、教育現場の状況

教育をめぐる問題として、依然として不登校児童生徒が多いことや、増え続ける発達障害の子供たち、陰湿化するいじめ、いじめを苦にした自殺の連鎖、教師への暴力行為、高等学校における単位の未履修等、様々な問題があります。更に、昨今児童虐待や登下校中の事件等、子供が犠牲になる出来事が相次ぎました。子供を慈しみ守るといった、本来日本人が持っていた価値観まで喪失してしまったかのようなようです。一方、飲酒運転による事故や食品偽装といった様々な事件が起こり、遵法精神や規範意識といった面においてもその低下が社会問題となりました。このように教育問題は社会全体の問題であり、そこには価値観の崩壊があるとの認識が広がっています。

また、給食費の未払い問題やモンスターペアレントと呼ばれる保護者の増加等が教職員の負担を大きくしています。その結果、条件付き採用後に退職する教職員の増加や精神疾患で休職する教職員が大きく増加していることも、見逃せません。今後、保護者が安心して子供を任せられる学校、教職員が職務に専念できる学校が望まれます。

三、教育現場における武士道精神の必要性

日本の生活習慣が欧米化する中で、凜とした日本人の美しさが現在忘れられてきました。IT化が進みインターネットや携帯電話

一、全日本教職員連盟とは

昭和五十九年に全国各地の教育正常化団体が大同団結し結成され、私たちは、自らを教育専門職としてその職務の重要性を自覚し、使命感を持って日々の教育活動に専念しています。結成当初から「美しい日本人の心を育てる教育の創造」という基本理念のもと、伝統文化や心の教育を重視し、児童生徒一人一人に目を配った教育活動を行っています。

教育は人創りです。常に「子供たちのためになるか」を価値尺度として、今と未来の教育に関し責任ある提言をし、それを実行する団体です。

話の普及で、様々な場面において匿名性が増してきました。これは、子供社会においても同様です。そんな時代だからこそ、倫理道徳がより大切なのです。教育は「百年の計」といわれるように、教育効果が直ぐに表れるようなものではありません。これからの日本を担う子供たちに、儒教の基本的な徳目である「仁義礼智信」に重きをおく武士道に通じる精神から心の教育を進めていくことが不可欠です。

儒学と武士道

(財)郷学研修所 安岡正篤記念館理事長

安岡正泰

一、はじめに

妖変の時代

二、士の意義

曾子曰く、士は以て弘毅こうきならざるべからず。

任重くして道遠ければなり。仁以て己の任と

為す。亦た重からずや。死して後已む、亦た

三、儒学と武士道

遠からずや。

論語

恒産こうさん無くして恒心こうしん有るは唯だ士のみ能くす。

孟子

曾子、子襄しじょうに謂いうて曰く、子。勇を好むか。

吾嘗かつて大勇を夫子に聞けり。自ら反して縮なほか

らずんば褐寛博かつかんぱくと雖も吾れ憍おそれざらんや。自

ら反して縮くんば千万人と雖も吾れ往ゆかん。

孟子

四、 武士道の本質 死生の道

黄門光圀卿、諸子弟を諭して曰く、汝曹年少、

一旦緩急あらば皆當に勇を奮つて而して首を

馬前に隕さんことを思うべし。然れども危に

臨んで死を致すは士の當分なり。血氣の勇は

盜賊猶お之を善くす。汝曹に望む所以に非ざ

るなり。士の士たる所以は死の難きに非ず。

死に處するを難しと為す。生くべからずして

而も生き、死すべからずして而も死す、皆道

に非ざるなり。然らば則ち何を以てか之に處

せん。聖賢の学を講ずるに在るのみ。

義公行實

五、 おわりに

自靖自獻。

天行健なり。自彊して息まず。

書經

易經

神道と武士道

神社本庁教誨師、元筑波山神社権宮司

矢作幸雄

武士という名称は存在したが、平安末期ごろから武士とはいわず、武者という名称が多くなった。鎧武者、荒武者、落武者、武者修行、武者人形、武者小路という姓ができたほどである。武士の士はもののふで、天皇をはじめ貴人を守る古語だが、乱世になり、敵味方入り交り争うところから士のものふの意味が薄れ、単に武力をふるう者、武者となったのであろう。武道の興隆は室町末期に頂点に達した。

三、江戸時代に高められる武士道

徳川家康が江戸幕府を開き、戦国の世が終ると荒武者の時代は終りを告げて、つわもの達は主君の下で禄を喰み、現代風にいえれば給料とりになった。安定した生活の中で求められるのは主君に対する忠義で、貴人を守る武士という言葉が復活した。儒教思想が普及して武士の歩むべき道が確立されたとき、武士道は成立したとみることができる。

四、今も生きている武士道

明治三（一八七〇）年に平民の帯刀が禁じられ、同四年に武士の断髪廃刀が許された。それまでの主君は或は県知事となり、或は許されて奉還し資金の援助を受けた。武士は武士でなくなり、軍人、巡查等に生活の糧を求めたが、秘かに武士道は引継がれて

一、上代の武士道

日本の国では武甕槌神が武の道を定めて、武道、武士道等の祖神と崇めらる。武士道の武は「戈（ほこ）を止（とど）む」から字が起り、平和が文字の原点である。神代の昔、武甕槌神は出雲へ赴き、大国主神に道理を語ることによって日本の国を一つにまとめあげた。神道は古代日本の自然体の生き方。仏教が伝来してはじめて神道という。日本書紀三十一代用明天皇の條「天皇仏法を信けたまひ、神の道を尊び給ふ」。

二、平安時代より戦国時代

院の御所の北に詰めている武士を北面の武士といい、古くから

時として現われることがあった。滅私奉公などという言葉は武士道の名残りである。戦時中に多くの軍人が国に生命を捧げ、学徒出陣など私心を殺して若者が散っていった。

現在、多くの若者が生き方を模索しているようであるが、利己的に走り易いのは戦後教育が教育の本筋から外れているからである。神道もまた清らかな本源を忘れて御利益に走り易い面がある。日本人の胸に眠っている清気を呼び覚ますには、歴史に残る武士道の姿を語り聞かせることが大切である。

< M E M O >

NPO法人 武士道協会 役員一覧

役職名	氏名	所属
理事長	塩川 正十郎	東洋大学総長、元財務大臣
副理事長	江口 克彦	PHP総合研究所代表取締役社長
専務理事	小野 晋也	衆議院議員
常務理事	笠谷 和比古	国際日本文化研究センター研究部教授 伝統文化プロジェクト長
常務理事	津田 佐兵衛	井筒八ッ橋本舗（株）取締役名誉会長
常務理事	鳥羽 博道	（株）ドトールコーヒー名誉会長
常務理事 事務局長	本多 百代	（有）Line Age(ラインエイジ)社長
理事	植田 宏和	全日本教職員連盟委員長
理事	鍵山 秀三郎	（株）イエローハット取締役相談役
理事	門川 大作	京都市教育委員会前教育長
理事	川路 妙	（財）式胤記念館京都ギリシアローマ美術館理事長
理事	川路 洋子	光陽グループ・KYエステート（株）代表取締役社長
理事	北澤 俊和	学生情報センターグループ代表
理事	西尾 晴夫	PHP研究所参与
理事	安岡 正泰	（財）郷学研修所 安岡正篤記念館理事長
理事	矢作 幸雄	神社本庁教誨師、元筑波山神社権宮司
監事	輿水 朝治	輿水会計事務所

NPO法人 武士道協会

〒六〇一―八四二 京都市南区西九条北ノ内町一 P H P 研究所内

TEL 〇七五―六八一―五五一四

FAX 〇七五―六八二―三五六五